

# 一心寺かわら版

第二十九号 平成二十五年九月発行

ホームページ (<http://www.jimyouzan-isshini.jp>)

## 非常袋に入れておくもの

近年の天候は異常気象と言われています。東日本大震災の原因となった大地震、観測史上最高を記録するほどの気温上昇、ゲリラ豪雨と言われる局地的な大雨、突然の竜巻、何度も「かつてない」、「〇〇年ぶりの」というニュースを耳にしました。八月三十日から、今までの警報の発表基準をはるかに超える豪雨や大津波等が予想され、重大な災害の危険性が著しく高まっている場合に新たに特別警報を発表し、最大限の警戒を呼び掛けることになりました。

災害は来ることが分かっていたら、被害を最小限に抑えるためにできることがあるかもしれません。しかし、聞いてから備えができて、早く予知できることは少なく、また、予知自体が困難なものです。それは先日の地震速報の誤報でもよく分かりました。緊急地震速報のメール着信音が突然鳴り響き、私も若坊守と二人で机の下に身をひそめました。しばらく待っても揺れは来ませんでした。実際はメールが届いた直後に小さな地震があったようで



す。もし大地震が来ていたら避難は間に合わなかったでしょう。地震学者のロバート・グレー東大教授は以前から「地震は予知できません」と断言されています。災害の予知は難しく、だからこそ普段からの備えが大切であることは言うまでもありません。

いざという時に備えておくべきものは何でしょうか。水、食料、懐中電灯、ラジオ、薬など生きていく上で必要なものを入れた非常袋を準備しておきましょう、経済面の備えとして保険に入っておきましょう、と言われます。また、いざという時に手を貸してくれる人がいることは大きな安心で、近くにいればなおさら有難いことです。近年になって核家族化、過疎化が進みそれが難しくなっており、心細く感じている人も多いかもしれません。



人生は予知できないものばかり、災害だけでなく、いつ何が起こるか分からない。何かが起こって自らではどうしようもない時に私たちはどうするでしょうか、そういう時は救いを求めて何かに手を伸ばそうとするのが私たち人間だそうです。

以前紹介した浅田正博先生のつり革の話を読んでいるでしょうか。人生を電車移動に例えます。まずは電車に乗り込み、始発駅からゆっくりと発車します。徐々にスピードが上がって目的地に向かいます。時々目的地である駅に停車し一休み、再びスタートします。時には揺れることもあるでしょうが、両足に力を入れて踏ん張ります。しかし、どうしても自分の足で堪えることができないほどの揺れ、急ブレーキがあった時にはどうするでしょうか。おそら



く一番近くにあるつり革を掴もうとします。いや、無意識に握ってしまうのかもしれない。そのつり革こそ私たちが人生でいざという時に頼るものです。ある人はすでにつり革を用意していたため安心して握り、苦しさの中でも微笑んでいるかもしれない。用意していなかった人は、掴むものが見つからなくて転倒してしまうか、何か分らないままに掴んでしまうことでしょうか。掴んだものは頼りにならない、もしかしたらより状況を悪くする偽物かもしれません。

私たちはいざという時に水や食料、保険だけで安心でしょうか。一番頼りになると思われる家族、親戚、近所の人々とのつながりはもちろん大切ですが、それだけで本当に大丈夫でしょうか。浅田先生は、宗教は人生のつり革だと言います。人生に大きな障害が立ちかかる時は必ず来ます。仏教は四苦八苦（生、老、病、死、愛別離苦（愛する者と別れる苦しみ）、怨憎会苦（恨み憎む者とも会わなければならない苦しみ）、求不得苦（欲して求めてもなかなか物事を得ることができない苦しみ）、五蘊盛苦（人間の身心を形成する五つの要素〈色・受・想・行・識〉から生じる苦しみが盛んに起こること）は誰しもが抱える根本の苦しみであると説きます。だからこそ、普段からしっかりした本当のつり革を用意しておかなければ苦しみは増すばかりです。世間のつり革である水、食料、保険、身近な人々も大切ですが、宗教というつり革はそれとは別の価値を持つものです。何も掴むことなく倒れるか、偽物を掴んで苦しむか、もし私を十分に支えることのできる本物の教えというつり革が用意できているならば安心でしょう。

では、その本物のつり革を準備するにはどうしたらよいのでしょうか。

真宗僧侶の安田理深氏に「本当のものがわからないと、本当でないものを本当にする」という言葉があります。当山の前任職は骨董品が好きですが、「本物と偽物を区別するためには本物を見るのが一番だ」と言います。しかし、私のような知識も経験も浅いものは、本物だけを見てもわかりません。しかし、本物と偽物を並べて見ると何となく分かってくる気がするのです。まず色々な教えを見聞きして試みるのが大切なかもしれません。

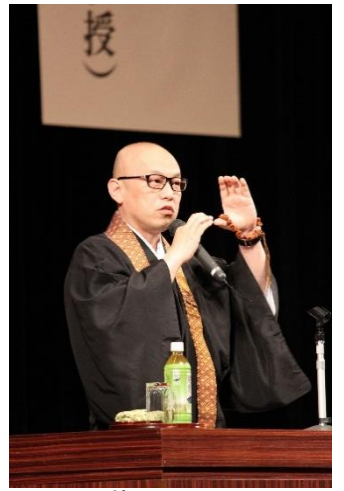
宗教には、神さまが言うのだから間違いない、というような教えもあります。仏教は仏さまが言うのだから間違いない、というものではなく、哲学であるとも言われるように、聞いた人がそれぞれ真実を証していくものです。

思い返してみれば私も、浄土真宗の話を聞いて初めて領けたのは大学三年のことだったでしょうか、それが始まりで次第に自ら聞くようになっていったように思います。

仏教・浄土真宗は素晴らしい本物の教えである、と誰が言ったとしても、本人が納得しなければ意味がありません。この不安定な時代に、支えとなる本物の教えを、目を、耳を、足を働かせ求めて、心の非常袋に入れてみませんか。

### 仏教講演会報告

毎年恒例の仏教講演会、今年の講師は釈徹宗先生でした。先生は相愛大学教授、浄土真宗本願寺派如来寺住職、NPO法人の代表を務められるなど多岐にわたって活躍されています。本日は「真宗のカナメ」と題しての講演。



現代社会は自分の都合を大きくさせる方向である。原因である自分の都合を整えない限り結果は変わらず苦しみが消えず、苦しみの連鎖が起こる。仏教には私の枠(思い)を整える、体、言葉、心の三つを整える方法がある。それによって私の都合を

小さくすることによって苦しみを小さくしていく。それを追求していくと出家になるが、社会生活を送っていく生活の中では限界がある。浄土真宗は行きつく先は同じだが違う道である。苦しみ・悩み・痛みという第一の矢は受けざるを得ないが、憎しみ・恨み・ねたみなどの第二の矢は受けないというのが仏道である。

浄土真宗は帰るところがある世界を説く。死んだらそれまで、というのと、帰る世界がある、では全然違う。つらい思いで帰った時に「お帰り」と抱きしめてくれる人がいることが有難い。『五体不満足』の乙武匡洋さんは、お母さんがジャガイモのような自分を見て「まあくかわいい」と言ってくれた、このことだけで生きていけると語っている。無条件で抱きしめてくれる人がいるだけで人間は生きていけるといふことだろう。

### 『真宗宗歌』

ふかきみ法に あいまつる 身の幸何に たとうべき  
ひたすら道を ききひらき まことのみむね いたただかん  
とわの闇より 救われし 身の幸何に くらぶべき  
六字のみ名を となえつつ 世のなりわいに いそしまん  
海の内外の へだてなく みおやの徳の とうとさを  
わがはらからに 伝えつつ 浄土(みくに)の旅を共にせん

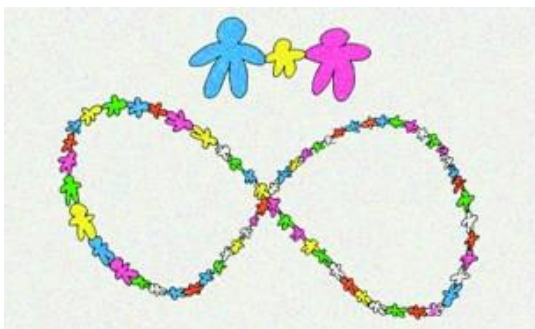
を取り上げ、かつて他宗の人が「真宗門徒は何かにつけて「御」をつける」と言ったが、これは真宗の特徴である。すべてを有難くいただいでいく。「あいまつる」の「あう」とは「値う」(価値)。「お腕のように二つのものがピタッと一致する意味。「ききひらき」、真宗は聴き続ける中で開かれる、阿弥陀如来に値遇する。「いただかん」の「ん」は意思を示し、身も心も納得して信じていることである。「闇」とは無明、光が強いと影ができる。阿弥陀仏の光に照らされると影、愚かな身と気づいても真つ暗闇ではない、それが救われたということではないか。そして「世のなりわいにいそしまん」、誠心誠意生きていく。南無阿弥陀仏とは南無、おまかせします。阿弥陀仏とは無量の光、無限のいのちを持つ仏ということ。真宗は時間と空間を超える教えであり、帰る世界をいただくことによって一杯歩んでいける、という「真宗のカナメ」を聞かせていただきました。

### 「そつとつながる ホッがったわる」

#### く結ぶ絆から、広がる「縁へく」

東日本大震災以後、「絆」が時代を象徴する言葉になりました。絆とは、離れがたくながりあっている関係を意味しています。悲痛な経験を通して、人と人との「つながり」の尊さへの気づきが始まっています。

さらに一歩踏み込んで、「つながり」のより深く広い意味を、仏教の立場から発信していくのが「縁」という言葉です。「そつと」とは、やさしく包みこむようにつながることを意味しています。「ホッ」とは、そうしたつながりの中で与えられる安心感のことです。



「ごえん」人と人を結びつける不思議なめぐりあわせです。  
「ごえん」わたしたちが自覚する以前から、つながっています。  
「ごえん」わたしたちが認識している以上に、遠くまで広がっています。

「ごえん」過去から現在、現在から未来へとつながっていきま

す。  
「ごえん」誰もがつながっていけることです。

「ごえん」わたしとあなたのことです。

「ごえん」わたしと仏さまのことです。

「ごえん」わたしのいのちを支えているものです。

「ごえん」わたしがここに存在していることそのものです。

「ごえん」わたしはあらゆるものにつながっています。

親鸞聖人の言葉を伝える『歎異抄』には、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり」とあり、すべてのものがつながり合っていることが示されています。また、『教行信証』には「遠く宿縁を慶べ」と、仏の救いに出遇えたよろこびが「縁」という言葉で表現されています。阿弥陀如来の救いが、はるか遠い昔から、わたしたちを包んでくださっていることが、仏の縁と示されているのです。

また、「縁」とは、わたしが関係の中にあることを知らせ、自己中心的な考え方を省みさせる言葉であり、生死の中でめぐまれたつながりの尊さを教えてくれる言葉でもあります。

「無縁社会」といわれる中、「ご縁」の尊さ、大切さを深めていきたいものです。

「本願寺派・御同朋の社会を目指す運動

(実践運動)」を改編

## ご縁を ありがとう

### 春季永代経報告



三月二十三日、春季彼岸会永代経法要、納骨堂勤行を厳修しました。法話は中原大道氏(高松市大乘寺)による音楽法話。グランドピアノを弾きながら、中島みゆきの「時代」、自ら作詞作曲された歌「雪どけ水」、「言葉にして伝えよう」、「最初で最後の瞬間」を歌いながらお話。悲しくても状況は必ず巡り変わる。自分が正しいとかたくなな氷のような心で苦しんでいるが、やわらかな水が流れるように生きていくことを目指すのが仏教。写真を撮るような気持ちで生活を一コマずつ眺めると、今あること、何でも全てが有難いしあわせな瞬間であることに気づかされる。今ここにあるしあわせに目覚めて生きていきましょう、とのお話をいただきました。

当山では初めての音楽法話という形式でしたが、歌詞カードを見ながら聞き入る参拝者の姿を見て、歌が伝える力を実感した法座となりました。

### 誕生報告



九月二日午後十一時四十分、住職と若坊守との間に赤ちゃんが誕生しました。おかげさまで、二八六四グラムの元気な女の子です。これからみなさまにお目にかかることもあると思いますので、当山の一員としてよろしくお願いいたします。 合掌